

統合・前進・勝利

日本共産主義運動の歴史的転換に応じ、マルクス・レーニン主義の赤旗を高高と揚げ、日帝打倒・米帝追放・プロ独立・社会主義を目指す巨万の革命的隊列を創建せよ？

革命通信

第32号
79年6月22日
価格 150円
連絡先 横浜
中央郵便局私
書箱 109号
三月舎

共産主義者同盟
マルクス・レーニン主義派

夏期一時金 五割カンパを要請す！

同志諸君・読者諸君！ 史上三度目の戦争と革命の時代が発展・爆発し、帝国主義戦争の第一段階へ突入する中で、日本帝国主義は体制的危機に直面し、戦争と社会主義革命の情勢がいよいよ接近している。

かくて現在、共産主義者の團結を求む声は、大きくなり、天の声になつてゐる。

わが同盟は75年2月の結成以来、自力更生と統合の建党運動を絶えず推し進めてきた。必ず、絶対にマルクス・レーニン主義の第三次ブンドを結成し、单一の全国党を創建する。

同志諸君・読者諸君！ 建党運動の躍進・勝利のための財政的支援をお願いする。

共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派 中央委員会

同志諸君、読者諸君！ 報告する。われわれと遊撃派の諸君は、相互に「統合の六条件」を持ちより、討議を重ね統合の六条件での一致を得た。又、この一致を基礎とし、更に厳格な討議を積重ね、練り上られた統合綱領を決定し、もって他のブンド系マルクス・レーニン主義分派との統合を推し進め、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを結成し、单一の全国党の創建の途につくことで両派は、一致した。

同志諸君、読者諸君！ ブンド系のマルクス・レーニン主義分派は、論争と組織的交流を深め、統合へ向けて進んでいる。「分派斗争から統合へ」、これが先進的労働者・労働人民の願いであり、ブンド系のいや真面目な共産主義者全体の趨勢である。統合し、全線にわたってプロレタリア階級独裁の準備を促し、強め、労働者、勤労人民の自然性的破壊力と共産主義者の意識的破壊力を強く結合し、日本階級斗争の革命的暴力的発展、前進を克ち取り、日帝打倒・米帝追放・プロ独立・社会主義革命に勝利するのである。われわれと遊撃派の諸君は、その先鋒隊中の先鋒隊である。マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成のための中核である。再度いう。われわれは、統合の六条件の一一致を大事にし、発展させ、厳格な統合綱領と練り上られた戦術・組織路線の獲得に向けて奮斗する。

七十五年前後以来のブンド統合の動きに押し上られ、導かれ、われわれと遊撃派の諸君の革命的団結が戦取された。現在、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成は、可能であり、必要である。七十五年前後にブンド統合の動きが始まった。しかし、当時の統合の条件は、実際上、ブンド総括と思想路線に限定されていた。つまり、「革命的理論」の形成は、未だ思想的理論問題の枠を超えていたのである。現在はどうか。マルクス・レーニン主義に基き、ブンド総括、思想路線、政治路線、当面の国際・国内情勢、戦術、組織路線が導きだされている。勿論、これに至る各分派の個的歴史性がこうした内容にまとわりつき、簡単に一致を獲む取れるわけない。しかし、統合の一一致の巾は広がり、綱領全体と革命的党活動全体を対象化しえる段階に各分派は成長し、登りつめている。ゆえに、現在のブンド系マルクス・レーニン主義分派の統合の気運の高まりが、第三次ブンド結成にむけた巨大な推進力となり、一つの時代的衝動にならっているのである。

同志諸君。読者諸君！ われわれと遊撃派の諸君は、両中央委員会の責任において相互の「統合の六条件」の一一致と、共同の統合の六条件を打ちたてることに成功した。

III、史上三度目の戦争と革命の時代であるといふ国際情勢と国内情勢の基本認識で一致すること。

IV、当面の反帝・反社帝・反霸権の国際路線と日帝打倒・米帝追放・プロ独立・社会主義革命の日本革命の政路線を結合することと一致すること。

V、プロ独立・社会主義革命の宣伝・扇動を強め、労働運動と共産主義の結合のもとで、労働者階級を組織して、武装蜂起をめざす当面の戦術である「正規の攻囲」で一致すること。

VI、職業革命家を中心とした、工場細胞を基礎とした中央集権非合法の全国党建設の組織路線で一致すること。」(「遊撃」54・55合併号) Iは、ブンド総括、つまり我々の「統合の六条件」のIに該当する。IIは思想路線であり、我々のIIに該当する。IIIは、当面の国際・国内の情勢認識であり、我々のIVに該当する。IVは、政治路線であり、我々のIIIに該当する。Vは、当面の戦術であり、我々のVに該当する。VIは、組織路線であり、我々のVIに該当する。両派の統合の条件は、順序の多少の違いがあれど、何を統合の基本

条件にするかでは完全に一致している。

この点を確認して両派は、一年有余の統合のための討議成果を踏まえ、条件の一つ一つに慎重、かつ厳密な検討を加えていた。ブンド総括に関して両派は、ブンドの急進民主主義を基盤とした。統合条件のI・Iは、両派が日本の革命運動の歴史を基礎としていること、つまり、主体的立場の表明であり、従って日本のマルクス・レーニン主義党を創建する場合、まずブンド総括、第三次ブンド結成から出発せねばならないことを示していく。

ブンドの革命的伝統とは何か。第一は、第一次ブンドが現代修正主義に転落した「共産党」と袂別し、議会主義を批判し、暴力革命、プロレタリア階級独裁の原則を堅持し、反米反獨占民族解放人民民主主義革命路線を批判し、日帝打倒・社会主義革命路線を確立したことである。この政治路線は、基本的に正しいし、継承・発展させることで両派は、一致した。

現在の日本の国家権力は、日本の資本家階級が握り、ブルジョア階級独裁を実行している。しかしこれは、米帝に補完され依存し、一定支配され従属している。第一次ブンドは、日帝のブルジョア階級独裁を見ていたが、これに対する米帝の特殊な役割・地位を見落していた。従って、日帝打倒・社会主義革命路線に米帝追放を部分的任務として含むことができなかつた。この誤りは、第一次ブンドが当時の「共産党」と構改派の「日帝自立・従属」論争に客観的に規定されていたためである。

第二は、第二次ブンドの国際路線である。第二次ブンドは、第七回大会報告の「任務」の中で「先進国階級斗争、後進国階級斗争、労働者国家内階級斗争の三つの階級斗争の有機的結合」という過渡期世界の三プロック革命の結合を提起した。この国際路線は、革新共同のアジアの社会主義国、民族解放斗争への敵対に抗し、アジアの社会主義国、民族解放斗争と結合し、日帝打倒・社会主義革命路線を推進する路線であり、部分的に反スタ・トロッキズムの影響があるとはいえ基本的に正しいし、継承・発展させることで両派は、一致した。

両派は、ブンドの主側面は急進民主主義、反スタ・トロッキズムであったこと、しかし、副次的側面としてマルクス・レーニン主義、毛沢東思想があつたことと確認し、前者を全面的に発展させ、前者を清算し、マルクス・レーニン主義の三次ブンド結成へ進軍することで一致した。

思想路線に関して両派は、急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の獲得、反スタ・トロッキズム批判・毛沢東思想支持で一致した。游撃派の諸君は、ブンドの弱点の「根本的切開なくして、弱点の克服はありえない」(「遊撃」54・55合併号)と、喝破した。然りである。ブンドの弱点の「根本的切開」とは何か。ブンドの思想路線にメスを入れ、急進民主主義を摘出し、マルクス・レーニン主義にとつてかえることである。ブンドの帝国主義に対する急進民主主義的態度は、資本主義批判II思想路線の急進民主主義に根拠があつた。

両派は、マルクス・レーニン主義とは共産主義(社会主義)と労働連合の結合のことであり、その特徴は大きく以下の三点であるとの認識に到達し、一致した。第一は、ブルジョア階級とブルジョア階級の関係の問題である。マルクス・レーニン主義は、資本と賃労働の関係での対等な私的所有者の売買関係が、実は「流通に属する仮象」でしかも、労働者の資本家に対する経済的隸従を隠蔽するものであると見、①生活手段及び生活源泉を独占的に私有する資本家階級に対し、そこから分離した労働者階級が経済的に隸従し、その結果、②生産における人と人との関係で労働者は剩余労働分は資本家が無償で取得し、搾取すると、暴露する。つまり、所有制に批判の眼目をおき、資本家階級から生産手段・生活源泉を奪取し、社会の共有制に移すことを共産主義革命の中心任務とし、生産における人ととの関係について、資本家による労働者の奴隸化を廃止し、三大差異を消滅させつ、生産物の分配制について、搾取を廃止し、能力に応じた労働・労働に応じた分配を実現し、次に能力に応じた労働・労働に応じた分配を実現するのである。第二は、ブルジョア階級とブルジョア階級の階級斗争、及び共産主義革

命の問題である。マルクス・レーニン主義は、ブルジョア階級、それは資本家階級が國家権力を掌握し、ブルジョア階級独裁を実行し、ブルジョア階級とブルジョア社会の秩序に労働者階級を服従させておき、資本主義とブルジョア社会の秩序に労働者階級を服従させてお

くための機関であると見、しかし資本主義的生産様式が資本関係を拡大生産し、資本蓄積の拡大再生産の過程で、資本主義的生産関係を共産主義的生産関係に代える物質的可能性をますます急速につくりだすと同時に一方では、より多くの、より大きな資本家を生みだし、他方では、より多くの労働者を生みだし、一層生産手段から労働者を排除し、資本関係の敵対的性格はいよいよ露になり、ブルジョア階級とプロレタリア階級の階級対立が激化すると、暴露する。つまり、生産力と生産関係の矛盾とブルジョア階級とプロレタリア階級の階級対立とを結合し、一方で共産主義革命をプロレタリア階級の階級斗争、ブルジョア国家を暴力革命で粉碎するプロレタリア階級独裁で実現し、他方で、プロレタリア階級の階級斗争をブルジョア国家を暴力革命で粉碎するプロレタリア階級独裁の共産主義革命にまで拡大・発展させるのである。第三は、プロレタリア階級とマルクス・レーニン主義の関係の問題である。マルクス・レーニン主義は、「プロレタリアートをすべてのブルジョア政党に対立する独自の政党に組織し」（「ロシア共産党綱領」）でいく党建設と階級形成の一元化であり、労働者階級をマルクス・レーニン主義の党に組織し、暴力革命、プロレタリア階級独裁、共産主義革命を実行するのである。

社会主義国、國際プロレタリア階級、被抑圧民族の当面の二つの主敵の一方であること。(回)しかも、後発帝国主義のソ連社帝が米帝に比較して、より好戦的、挑発的であること。(イ)米帝は、ソ連社帝に追い上られているが、依然として世界最大の帝国主義であること。(乙)ソ米二超大国のいずれかと手を結び霸権を拡大する動きが激化していること。(丙)現在、世界革命の主力軍が反帝民族解放斗争であり、従つて国際階級斗争の発展段階は、依然として反帝人民斗争の段階にあること。(ヘ)こうした事からソ・米二超大国に反対し、霸権主義に反対する斗争は、世界革命の当面する大方向に合致していること。特に、本年初め来、ソ連社帝が修憲を手先とし、アジアの社会主義国、民族解放斗争を封じ込め、粉碎するための軍事攻撃を激化させている中で、アジアの社会主義国、民族解放斗争の反ソを重視した反ソ反米反霸権は、全く正しい、との見地を共有了した。

両派は、政治路線を綱領の歴史的実践的部分である第二章、第三章に貫き、刻み込むことで一致した。

当面の国際－国内情勢認識に関して両派は、現在は史上三度目の戦争と革命の時代であるという国際－国内情勢の基本認識で一致した。

見ていいだけ、ソ・米の第三次世界大戦の危険性の増大を見て
いないのである。

両派は、現在は、史上三度目の戦争と革命の時代であり、第三次
帝国主義戦争の第一段階が始まっているとの認識で一致した。
かかる情勢の特徴の第一は、ソ連社帝と米帝が世界霸権を競い、
争い、対立を深め、第三次世界大戦の策源地となつてゐること。第
二は、アジアの社会主義国と結合した民族解放斗争が世界革命の当
面の主力軍であること。第三は、アジアの社会主义国が自力
更生の下、革命をつかみ、生産を促し、戦争に備え、世界革命の根
拠地・大後方のために社会主義建設を推し進めてゐること、第四は、
ソ連社帝のザイール、ソマリア等への侵攻、と同時に、ソ連社帝を
後盾としたベトナムは、カンボジアへの侵略・軍事占領・併呑、中
国に対する国境武力挑発によつて、霸権を急速に拡大してゐる。こ
れらは、ソ連社帝の世界霸権を目指す帝国主義政治と不可分に結び
つき、その継続としての局地戦争であること。

当面の国内情勢に関して両派は、國際情勢と連動し、日本でも戦争と革命の要素が増大していくことで、一致した。

つまり、日帝は、ソ・米の霸権争奪の激化に対抗するために、朝鮮侵略反革命の強化のために、又、プロレタリア階級の増強への対抗・社会主義革命に対する反革命のために、國家権力を反動化し、天皇制を前面におしだし、社帝の忠勤を促し、対外的には、反ソ親中連米路線をひく、とともに、資本主義の高度成長が破壊し、恐慌の後、長期の不況がつづく中で、国独資を強化し、その下でプロレタリア階級と勤労人民に対する搾取、収奪、抑圧を強めている。

これに對してプロレタリア階級と勤労人民は、朝鮮侵略反革命と戦争に反対する斗争、反動化に反対する斗争、国独資の下での搾取、収奪、抑圧の強化に反対する斗争などを激化・発展・爆発させつつ

こうした事から両派は、△戦争と革命の問題▽国家と革命の問題▽でのマルクス・レーニン主義的見地を系統的にプロレタリア階級と勤労人民に注ぎ込み、押し広げ、貫き、思想・政治武装させることが緊要になつてゐると判断し、レーニンの帝國主義戦争に対する革命的祖国敗北主義、即ち「帝国主義戦争を内乱！」の戦術を継承、発展させ、擁帝祖国防衛派を批判し、これときっぱりとした一線を画すことで一致した。

両派は、当面の国際・国内情勢認識の一一致を、綱領の第二章・第三章の当面する国際・国内情勢の特徴の中に、刻み込むことで、一致した。

当面の戦術に関して両派は、ブンドの「過程としての戦術」を転換し、「計画としての戦術」を実行することで一致した。

「計画としての戦術」は、マルクス・レーニン主義の思想路線である。

第二次フントの政治路線は、革共同のアジアの社会主义国・民族解放斗争への敵対に抗し、アジアの社会主义国・民族解放斗争を支持し、これと日帝打倒・社会主义革命路線の結合を計ったが、實際上、國際路線に国内路線を解消し、もって、世界革命の場所的實現という観念論に陥っていた。これと帝国主義を政策の体制と見、日米安保体制を日帝のアジア侵略・反革命の軍事外交政策とし、日帝の侵略・反革命政策、及びブルジョア階級独裁の統治形態のブルジョア議会制民主主義からファシズムへの転換／阻止を、即権力斗争と見る考えがわからがたく結びついていた。つまり、急進民主主義と反スタ・トロッキズムによって國際—国内路線の正しい統一を実現しえなかつたのである。従つて反帝と結びついた反修斗争も、反戦反帝斗争の左派性を競う戦術的分歧としてしか組織できなかつたのである。

両派は、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想＝反帝反社帝の下に政治路線を、当面の國際路線の面では、反ソ反米反霸権とし、国内路線の面では、日帝打倒・米帝追放、プロ独・社会主义革命とすることで一致した。

両派は、日本革命の路線に關し、容易に合意に到達した。問題は、國際路線であった。しかし、両派は以下の諸点で一致し、反ソ反米反霸権の國際路線を斗いとつた。(1)現在、ソ連社帝は、米帝と並び

経済斗争、民主主義斗争に狭める労働組合主義・経済主義になつた。

(イ) 資本主義は、生産の社会化と労働者階級の階級斗争として物質的基礎と原動力を形成し、社会主義革命を必然化する。(ロ)だから、社会主義革命は小ブルジョア・インテリギエンツィアの斗争ではなく、労働者階級の階級斗争、その最高の発展としてのプロレタリア階級独裁で実現せねばならない。(ハ) 資本家階級は、生産手段を独占し、國家権力を掌握し、労働者階級を服従させている。(ニ) ゆえに、労働者階級の階級斗争を自然発生的な質上げや反合理化の経済斗争、政策反対・阻止や政府反対・打倒の民主主義斗争にとどめるのではなく、目的意識的にブルジョア国家権力を打倒する社会主義革命へ指導せねばならない。(リ) それには、「プロレタリア階級独裁・社会主義革命の宣伝・扇動を実行し、経済斗争・民主主義斗争の中に注ぎ込み、労働者階級を組織してマルクス・レーニン主義党を建設し、「正規の常備軍を創出し、動員した上で、革命戦争・武装蜂起を実行しなければならない。

両派は「計画としての戦術」を実行するために、日帝の反動と戦争の熱望の高まりに対し、諸階級、諸階層の国家に対する態度を厳

工場内下級委員会を基層とする中央集権主義の全国党建設」を目指すことで一致した。

「計画としての戦術」とヘルメット政治からの全国政治新聞への転換は、固く結びつき、全国政治新聞を党活動の基礎とすることに規定されて、第三次ブンドの党の型は、職業革命家を中心とし、工場細胞即ち工場内下級委員会を基層とする型が導き出される。

とする宣伝・扇動は、全面的暴露を基礎とした全国政治新聞だけが可能であり、宣伝・扇動をこのようにプロレタリア階級独裁・社会主義革命に拡大することに規定されて、宣伝・扇動・組織化の方法、活動の方法の軸も全国政治新聞の発行・配布にせねばならない点で両派は一致した。このような宣伝・扇動・組織化の方法・組織活動に規定されて、党の型を地区党方式から工場細胞Ⅱ工場内下級委員会方式へ転換せねばならない。工場細胞Ⅱ工場内下級委員会は、地方委員会に代って工場内で党の全活動を遂行する。したがって、更に各々の活動を遂行する各々のグループを組織する。工場細胞Ⅱ

創建する斗いの最前線が工場細胞II工場内下級委員会である。こうしたことから工場細胞II工場内下級委員会は「工場での社会民主主義活動全体を行う委任と全権を地方委員会から受けたきわめて少數の革命家によって構成されなければならない」のであり、「純労働者組織型または職業組織型の伝統とは完全に手を切らねばならない」のである。工場細胞II工場内下級委員会を革命家の組織として建設しきらねば、数千、数万の渡政を生みだすことは出来ない。

両派は、戦術・組織路線の一一致を通じ、革命的党活動の根本問題での一致を乞う取つた。

同志諸君・読者諸君！ 今や、われわれと游撃派の諸君との統合にむけた綱領全体・革命的党活動全体の基礎は、打ち固められた。われわれと游撃派の諸君は、「統合の六条件」の一一致を踏まえ、その全成果を統合綱領・戦術・組織問題の中に刻み込み、分派の歴史に幕をとじ、75年来のブンドの統合の動向に、全く新しい一ページを開き、攻勢的建党運動に打つて出ねばならない。志中ばに倒れていった同志達よ！ われわれの前途を見守つてくれたまえ。

第一章 に日本本邦の革命と権力問題と米帝進放

価しつつ、この忠告を受けいれ、一致した。

現在の日本の國家権力は、資本家階級が掌握し、ブルジョア階級独裁を実行している。従って國家の型はブルジョア国家であること、このブルジョア階級独裁を國家形態、つまり、毛沢東の「ある階級が敵階級と斗い、自分を守るための政権機関をどんな形で組織するか」という上へ政体、下へから見れば、日帝のブルジョア階級独裁は、日米安保体制をつうじて、米帝に補完され、依存し、一定支配され從属しているのである。ゆえに、現在の日本の國家権力の問題と國家形態（政体）の問題の正しい統一的把握を定式化すれば、「現在の日本の國家権力は、日本帝国主義、つまり、資本家階級が掌握し、ブルジョア階級独裁を実行している。しかし、これは米帝国主義に補完され、依存し、一定支配され、從属している。」「日・米安保体制がそれであり、日・米安保条約によつて日本の自衛隊が在日米軍と不可分に結合していることに集中的にあらわれてゐる」となる。以上の内容で、われわれと游撃派の諸君は、一致した。

又、同じ31号で「我々は『民族解放』といふ言葉に固執しない。實質を示す『米帝追放』でもよい」との見地を我々は、明らかにした。これに対し、游撃派の諸君がわれわれに対し「米帝との民族矛盾は副次的なものであり、権力問題に対する他階級、階層に対する日本プロレタリアートの指導性と社会主義革命に向けた政治任務・統一戦線の問題として米帝追放をめぐる路線を明らかにしなければならない。とくに日本プロレタリアート・人民は抑圧民族であり、われわれの革命的立場は祖国敗北主義以外にないがゆえに、マルクス・レーニン主義派の諸君の『民族解放』の規定は、不充分ではないかと考える。」と忠告してくれた。この游撃派の諸君の主張には論理矛盾がある。游撃派の諸君は、一方で、日・米間に民族矛盾があることを主張し、他方で、「日本プロレタリアート・人民は抑圧民族」であるといふ。論理矛盾である。游撃派の諸君がアジアの諸民族に対し、日本民族は抑圧民族であると指摘する。見るのは、正しい。しかし一面的であり、日・米間に民族矛盾があり、米帝に対し日本人民は被抑圧民族の面もある。両面を見、前者が主側面であるとすべきである。

しかし、游撃派の諸君の忠告を基本的に受け入れたい。われわれは、米帝追放を「民族解放」という扇動・戦術スローガンで押ししだしていくことが正しいか、否かを検討し、正しくないとの結論に至つた。理由の第一は、第一次世界大戦に敗北し、ヴェルサイユ体制の下で「經濟的に生存していくために物質的に不可能な条件、まったくの無権利と屈辱の条件のもとに」おかれれた20年代のドイツや、独占資本主義ではあつたが対外的な意味で帝国主義ではなく、日本のブルジョア階級独裁が米帝に補完され依存し、一定支配され從属する関係が大きく、強く、強固だった50年代の日本とちがい、現在、日帝、つまりブルジョア階級は日米間の民族矛盾を欺瞞的・改良主義的解決と自己の帝国主義的膨張を結びつけ、他民族、つまり、南朝鮮・東南アジア諸民族を事実上、植民地支配に縛りつけていること。理由の第二は、第三次帝国主義戦争の第一段階という最新の国際情勢に規定されて日帝が一層反動と戦争の熱望を高め、反ソ反共民族解放の排外主義イデオロギーを国民的利益と称してデマリ、中農・都市小ブルジョア階級の経営、小所有の危機感を扇動し、ブルジョア階級独裁の社会的支柱へ動員する、と同時に、戦争の水先案内人としつつ、これに労働者階級をひきつけ、他民族の面が拡大していること。理由の第三は、日帝に対して、アジア、特に南朝鮮の反米反日朴打倒の民族民主革命が発展・爆発し、朝鮮人民の自主的平和的南北統一斗争が大いに前進していること。理由の第四は、こうして現在では、安保体制の中で、日帝の比重が増大し、米帝の比重が低下し、日本革命において社会主義を事実上、植民地支配していることを曖昧にし、抑圧され隸属し、平等の権利をもつていられないアジアの諸民族との明確な区別を引けず、真にアジアの民族解放斗争と結合し、日帝打倒・社会主義革命路線を推し進めることができない。米帝追放を日帝打倒・プロ独立・社会主義革命へ不可分に、わかつ固く結びつけ、プロレタリア階級がこの面での主導権を握り、社会主義統一戦線の広々とした舞台と条件の形成へ押し上げたためには、「米帝追放」のスローガンが排除主義者に利用されることも、又、客観的にこうした動きを促すこともなく、当面の扇動・戦術スローガンとして妥当であると考える。

こうした諸点でわれわれは游撃派の諸君と一致した。

こうした諸点でわれわれは游撃派の諸君と一致した

戦術スローガンとして妥当であると考える。

しかし、遊撃派の諸君の忠告を基本的に受け入れたい。われわれは米帝追放を「民族解放」という扇動・戦術スローガンで押しだしていくことが正しいか、否かを検討し、正しくないと結論に至った。理由の第一は、第一次世界大戦に敗北し、ヴェルサイユ体制の下で「経済的に生存していくためには物質的に不可能な条件、まったくの無権利と屈辱の条件のもとに」おかれた20年代のドイツや、独占資本主義ではあったが対外的な意味で帝国主義ではなく、日本のブルジョア階級独裁が米帝に補完され依存し、「一定支配され従属する関係が大きく、深く、堅固だった50年代の日本とちがい、現在、日帝、つまりブルジョア階級は日米間の民族矛盾を欺瞞的・改良主義的解決と自己の帝国主義的膨張を結びつけ、他民族、つまり、南朝鮮・東南アジア諸民族を事実上、植民地支配に縛りつけていること。理由の第二は、第三次帝国主義戦争の第一段階という最新の国際情勢に規定されて日帝が一層反動と戦争の熱望を高め、反ソ反共民族解放の排外主義イデオロギーを国民的利益と称してデマリ、中農・都市小ブルジョア階級の経営、小所有の危機感を煽動し、ブルジョア階級独裁の社会的支柱へ動員する、と同時に、戦争の水先案内人として、これに労働者階級をひきつけ、屈服させようとしていること。理由の第三は、日帝に対して、アジア、特に南朝鮮の反米反日朴打倒の民族民主革命が発展・爆発し、朝鮮人民の自主的平和的南北統一斗争が大いに前進していること。理由の第四は、こうして現在では、安保体制の中で、日帝の比重が増大し、米帝の比重が低下し、日本革命において社会主義革命の任務は拡大し、米帝追放の任務が縮少する、と同時に、日本人民は米帝に対する被抑圧民族の面が縮少し、アジア民族に対する抑圧民族の面が拡大していること。理由の第五は、以上から米帝追放を「民族解放」として扇動することは、日帝がアジアの諸民族を事実上、植民地支配していることを曖昧にし、従って日本人民の主側面が抑圧民族であることを曖昧にし、抑圧され隸属し、平等の権利をもつてしないアジアの諸民族との明確な区別を引けず、眞にアジアの民族解放斗争と結合し、日帝打倒・社会主義革命路線を推し進めることができず、ゆえに、米帝追放の任務でプロレタリア階級が主導力を發揮し貧農・中農・都市小ブルジョア階級を原動力とするところには、「米帝追放」のスローガンが排斥主義者に利用されるとともに、又、客観的にこうした動きを足すこともなく、当面の弱勢

労働運動の歴史と私たるの態度
—共産主義者と先進的労働者はどのような傾向を克服し、何を眼目にすべきねばならないか—

第一章 労働運動の歴史的転換

「七九春闘」は、この数年間進行してきた労働運動の底深い歴史的転換点と、諸潮流・諸勢力の分化・再編、その全容を、もはやおしとくめようもなく公然たる明るみへと浮上させた。

ジョア階級独裁の反動化－全線における政治的反動と「(帝国主義戦争と反動・反革命の挙国体制」創出への力の傾注という事態の中で、労働運動もその根本思想・政治的態度と役割・根本進路をめぐつて直接にふるいにかけられ、大分化・大再編が不可避となつている。

て実現しようという運動、そういう圧力部隊として労働者を動員し、そのみかえりとして何がしかの改良をひき出し、労働者を欺いてきた運動が、決定的に破産をさらけ出したのは全くもって避けられないことであつた。彼らは今や、この言葉の眞の意味での反動的な小ブルジョア的空理空論—空想的計画を、ソcial帝との結びつきをもつて追求し、ソcial帝の力を背景として実現しようとしているのであり、その意味での「戦闘性」を強めようということに他ならない。それも又帝国主義戦争に組し、霸権主義を擁護し、国家独占資本主義を強化し、ブルジョア階級独裁の支柱としての地位を高めることの一つかの形態に他ならない。

だが、これらと対抗し、これらと並んで、資本攻勢の全般的激化

に抗し、「戦争と反動・反革命の華國体制」創出に抗する、プロレタリア大衆闘争の増大と戦闘的進出が、総評―同盟・JC―未組織の枠組みをこえ、国営部門・民間独占部門・中小零細・臨時・パート失業労働者の分断をこえて、一つに結ぶ、下からの闘いと戦闘的統一のうねりをつくり出し、地域・産別の共闘体制を築きながら徐々に全国的発展をつくり出し、更に人民闘争全体の最前線へと進出してその推進者としての力を發揮し始めるところまで進んでいる。そしてその中からマルクス・レーニン主義による武装と、マルクス・レーニン主義の革命党建設に結合しようとする志向と萌芽が生み出されている。

たとえば、七八年、先進的労働者の隊列は三里塚農民と共に三・

然化し、仕上げに向つてゐる。

それは疑いもなく、今日の日本の労働組合の大半の指導権を握り牛耳つてゐる一群の労働貴族が、その様々な色合いと各々の狭い特権の維持・拡大をめぐる思惑の対立にもかゝわらず、支配階級の資本攻勢の全般的激化―国家独占資本主義の強化に対する全面的協力と、「戦争と反動・反革命の拳国体制」の一翼へと労働運動を引きずり込み、ブルジョア階級独裁に対する徹底した忠勤と支配階級に対する一層の政治的協力の下で、自己の地位・特権を維持し、労働者大衆の昂まる反抗の増大を抑え込み、取るにたりない改良を引き出して労働者大衆を欺き、支配者階級の輒の中に一層深く投げ込んでいくこうとするものに他ならない。

だからそれは又、支配階級の現在の政治的代表人―大平の下で進

行している、自民党から民社・公明・社民連・社会党的一部に到る事実上の「連合」と固く結びついているのであり、ブルジョア階級独裁の軍事的支柱と社会的支柱との直接間接の、公然隠然の結びつきの強化をその背後に示しているのである。

主義路線を最も体系的に代表してきた官本一派・社会主義協会と岩井や、その「左」に連つてきた部分が、その一部は勤労革マル派や全金の一部のように、戦闘的左派の「処分」でもつて前記の流れに組しはじめ、多くはソ連派修正主義の大結集・ソ社帝との結合強化・ソ社帝の力を背景とし、独占資本を「規制」して、八十年代の日本帝国主義の方向転換を実現することを政治的結集軸とし、それに岩井の「左派勢力結集」を結びつけながら、前記の流れとの「抗争」を深めている。

内からのページ・統制処分を打ちおろしながら、全体としてブルジョア階級独裁の反動化と労働貴族供の「戦線統一」による一層の忠勤を全線にわたつておし進めることでもつて、社会主義革命に結びつく一切の要素の鎮圧に力を注いでいるのである。こういうことが、先進的労働者をして、従来の「左翼バネ」—改良主義労働運動の左からの突き上げ、戦術的な戦闘的左派—左翼反対派の地位に甘んじることなく、それから脱却し、独自の指導部隊として進もうという志向を強めさせていく。

だからこそ我々は、このことをそれとして美化し、追随して、受動的役割にとどまるのではなく、現在の事態の眞の根本性格・根本問題を

明らかにし、「二十年を一日に圧縮する日々」が近づきつゝあることを明らかにし、労働者階級をプロレタリア革命へ向け準備させ、教育し、訓練していくことに全力を注がねばならず、とくに今日の先進的労働者をそういう革命的な指導者部隊へと高め、鍛え、統合していくために力を注がねばならない。

既に指摘した事態の進行は、まさに我々がこういう役割を發揮するよう押し上げられ、又そのための条件・舞台・要素が急速に拡大し、増え緊切のものとなつていることを示しているのである。

「彼らがこれまで「ハシ」で階級以上に一資本主義の安定と繁榮を信じ、その矛盾の政策的・改良主義的緩和の可能性を信じ、「公正な分配」「独占利潤を住民福祉に向けていく生活制度要求」「財政民主化」「労働分配率の拡大による個人支出増加による恐慌克服」「経済の民主化・健全な資本主義の要求」という右翼的欺瞞的な空理空論を掲げ、「人民的議会主義による民主主義の拡充」「外交政策の転換による戦争の回避」「帝国主義の下での諸民族の平等」と平和的竞争」「帝国主義の下での軍備縮少」等、労働者を欺くにすぎない空理空論を掲げ、まさに資本主義とブルジョア階級独裁の下で帝国主義を政策的に変更し、矛盾を緩和し、労働者と被搾取大衆の状態を救済し、階級闘争を緩和するという空想的な社会改良計画」こういう計画を、独占ブルジョアジーに圧力を加え、規制・説得し

第二章 共産主義者と先進的労働者は何をなすべきか

以上、明らかにしてきた現在の労働運動の歴史的転換点、その歴史的地位・性格・特徴、その根本問題・本質的な問題・主要な問題、そして共産主義者と先進的労働者が進み出すべき方向・双肩に担うべき任務・果すべき役割にふまえて更に、とくにブンド系のマルクス・レーニン主義諸分派、及びこの諸分派と結びつきながら共に闘つている先進的労働者の中で、どのような傾向を克服し、何を眼目ににして、自分達の活動を頑強におし進めていかなければならぬか？に今少し立ち入り、我々の活動を一層一致共通した、系統的なものたらしめていくための一助としたい。

我々一すなわちブンド系のマルクス・レーニン主義諸分派、及びこの諸分派と多少とも結びつきながら共に闘つている先進的労働者一の中では、綱領において、思想・政治路線において、急進民主主義からマルクス・レーニン主義に転換し、今日の史上三度目の戦争と革命の時代と、日本におけるハ帝国主義戦争と社会主義革命の接近という情勢に応じて、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をまっすぐにめざす「正規の攻撃」を組織し、常備軍を結集し、組織し、訓練し、動員していくことに力を注がねばならないこと、又綱領の転換を戦術・組織の転換へおし広げ、宣伝・扇動の活動方法において「ヘルメット政治」から全国政治新聞を要とする活動へ転換し、組織上において、「地区党」方式から、職業革命家を中心とし、工場細胞を基礎とする組織路線へと転換し、革命的宣伝煽動をもつて経済闘争、民主主義闘争にも分け入り、労働者階級の多数をプロ独・社会主義の味方に獲得し、社会主義革命へ準備させ、教育し、訓練していく指導的役割・指導能力を鍛え上げていかねばならないこと、こういうことは既に共通の確認となっている。しかし、我々はこの過程において、この転換の内容が、性格が、その真の意義が一面的に理解されて、次のような傾向が若干なりとも生まれ、存在していることをも又指摘し、その克服を呼びかなければならぬ。

その第一は、プロ独・社会主義革命の宣伝・扇動を執拗に、系統的に労働者の中に（とくに先進的部分）おし広げ、労働運動の全般にわたつてハ（社会）帝国主義と社会主義の分裂（まさに何よりも思想的・政治的分裂）をおし広げていく思想的・政治的闘い・思想的・政治的武装をおし広げていく闘いを軽視し、現にあるところの運動・現にあるところのプロレタリア大衆闘争の戦闘的推進と指導を一面的に強調し、前者を後者に解消してしまふ傾向である。

第二は、ハ帝国主義戦争と社会主義革命の接近という情勢を明らかにし、「戦争と革命」「国家と革命」の問題を要にすえ、一切をそれに結びつけた政治的扇動を労働者の中に持ち込み、プロ独・社会主義を要にして政治闘争と経済闘争を結合して闘う指導から後退し、とくに政治的扇動・政治闘争を軽視し、経済闘争の指導へと一面化していく傾向である。

第三は、我々の活動を労働者階級の多数を対象とする活動へと移行させ、労働者階級の多数を獲得し、指導し、代表していくことが、とくに現在では革命的中核をつくり出し、拡大し、思想闘争・政治闘争・経済闘争の全体にわたつて彼らの能力・宣伝・扇動・組織化の能力・指導能力を鍛え、訓練していくということをたえずその基礎にすえ、又たえずこのことに結びつけて、おし広げ、前進させていかねばならないことを軽視し、その結果、労働者階級の多数の獲得・指導・代表ということを、現在、多数を階級的めざめと階級闘争の端緒へと引き入れ、その限りでの一定の範囲内における階級的自覚と組織的訓練へと動員する役割を果して建設し、訓練するところから、労働組合の左派フラク・指導フラクへ、更に組合の書記官へと低めていく傾向である。

勿論、我々はこう言つたからといって、現在の資本攻勢の全般的激化と労働者大衆の憤激と反抗の増大、資本の本性に対抗する団結と闘争力の昂まりと戦闘的進出、そこでの社会帝国主義者の亀裂・対立・衝突の拡大、そして労働者階級の多数が現在こういう仕方で階級的めざめと階級闘争の第一歩へと引き入れられ、又こういう牛耳られていること、だから我々が前記の過程を更におし広げ、深め、その戦闘的強化と進出をおしあり、労働組合の指導権を社会帝国主義者・改良主義者から奪い返していくために、積極的役割を果し、この面でも我々の指導能力を鍛え、訓練しなければならない

こと、こういうことを否定したり、軽視・冷淡・受動的であつてよいと言つているのではない。（又、改良主義指導部の裏切り行為に對して、即労働組合の分裂・その目的化ハ「左翼少数派主義」でもつて応じよと主張するものでは全くない。）

我々はこういうことをも自己の革命活動の一部分としていかなければならない。我々が強調しているのは、我々の革命活動をこういうことに限つてはならず、更にこういうことを主たるものとしてもならず、プロ独・社会主義を空文句にしてしまつてはならないといふことである。

我々はプロ独・社会主義革命を労働者の中でたゆみなく、意識的に、宣伝し、扇動し、それを現在の情勢と結びつけ、労働運動の歴史的転換点ハ（社会）帝国主義と社会主義の分裂と結びつけ、戦争と國家権力の問題を握りしめた政治的扇動と結びつけ、労働者を革命闘争へ組織し、動員し、訓練していくことに最大の力を注がねばならないのである。このことを實際に基軸にすれば、これに前記の事柄を結合させる時にこそ、それをも革命活動の一部分とすることができるるのである。

現在の労働運動の歴史的転換点とその性格・特徴をみると、これはとくに強調され、押し出されねばならず、又先進的労働者を急進民主主義・戦闘的経済主義から脱却させて、真に共産主義的前衛隊列へと引き上げ、訓練し、全国的なマルクス・レーニン主義の建設を強力に押し上げていくことが依然として最も緊切の任務であるが故に尚更である。

そしてこのようにして革命的中核、革命家の組織の建設を基軸にして推し進め、それを発達させる時にこそ、我々は自己の革命活動を一層広汎に組織し、労働組合に対しても真に社会主義の指導権を打ちたて、社会主義革命を目指すプロレタリアートの全般的階級斗争の一部分、社会主義の学校としていくことができるであろう。だから我々は、我々の活動の眼目を次の四点に定式化し、それを実地にねり上げ、訓練し、発達させていくことに精力を注ぎ、そういう経験をこそ蓄積しなければならない。

第一は、プロ独・社会主義革命の宣伝・扇動を、労働運動全般におけるハ（社会）帝国主義と社会主義の分裂を組織し、おし広げ、とくに先進的労働者をして戦術的左派・運動的左派から思想的政治左派へと引き上げ、プロ独・社会主義の思想的政治的武装をおし広げていくことにして、社会主義革命を目標とする政治的組織活動を訓練し、鍛え、発達させるということを基軸にし、これをたえず堅持しながら、経済闘争においても（従つて又それから生じてくる組合主義的政治闘争においても）積極的役割・指導的役割を強めよう。この双方において社会帝国主義者を暴露し、闘争し、駆逐していくことを意識的におしはかっていくこと。第三は、工場・地域・職場に革命的中核・革命家の組織をつくり出し、その宣伝・扇動・組織の能力を、その指導能力を、その頑強な革命的組織活動を訓練し、鍛え、発達させるということを基軸にし、これをたえず基礎にすえ、これに一切を結びつけながら、労働者階級の多数を獲得し、代表し、導いていく役割を果していくよう努めねばならず、特に今日その条件・舞台・諸要素が急速に増大している、労働者階級の基幹層・基幹的部分と、広汎な下層の大衆との階級的協力・戦闘的統一を強め、特權的上層・労働貴族とそれを基盤とする社会帝国主義者との一層大規模な、全国的な対抗を強めるよう導いていかねばならない。これはたゞ全国的なマルクス・レーニン主義の建設をその基礎にする時一すなわち眞に革命的な思想的政治的組織統一を基礎とし、それ導かれる時にのみはじめて、全面的な、貫とした強固なものとすれることができるのである。第四は、以上の事柄に、系統的に、たえることなくおし進め、分散的・手工業的摸索から一致共通の、工業的活動へと移行させ、又、こういう事柄における経験を汲み尽し、共通のものとして蓄積し、鍛え、発達させていくには、全国政治新聞を要におかねばならない。マルクス・レーニン主義に貫かれた綱領・思想・政治路線の土台の上にすえられている全國政治新聞を要にし、それを眞に全国政治新聞の名に価するものへと発達させていくことを、全ての自覺的な先進的労働者の共通の事業・共通の活動としていくことによつて、増え力強いものとしていくことができる。新聞の配布網・受任者網を組織し、新聞による討議を、新聞による宣伝・扇動・組織の活動を組織し、新聞への通信と報告の活動を組織し、組織せよ！

我々は、以上の四つの眼目を込んで離さず、この眼目を貢ぎ、この眼目に沿つて、更に更に奮闘しなければならない。そうすれば、我々はもつと多くのことを、もつと豊かに、もつと鋭く把み出していくことができるであろう。わがものとしていくことができるであ

4・21「カンボジア革命四周年・ベトナムのカンボジア侵略弾劾・民主カンボジア連帶集会」報告

4月21日 「カンボジア革命四周年・ベトナムのカンボジア侵略弾劾・民主カンボジア連帶集会」が4/21集会実行委の主催で開催された。集会は、実行委に起集する首都圏の学友を始め、60名を越す学生、労働者が結集し、基調報告を全体で確認したあと、映画・日本カンボジア友好協会坂本徳松氏の講演をうけ、名大学からの斗争報告をうけたあと、最後に共産同遊撃派と我々がアピールを行ない、最後まで貫徹された。

この集会の意義は、現代修正主義、「毛沢東思想派」、反スタ・トロツキズム諸派とのベトナム・カンボジア問題を通した第三次帝国主義戦争の第一段階と日本革命に対する態度の明確な思想的、政治的分歧を克ち取ったことである。日「共」の「カンボジア内戦」というデマ宣伝、トロツキズムの第4インターの「インドシナ革命完全勝利・インドシナ連邦万才」というベトナムの侵略を正面から賛美する部分、反スタ・トロツキズムの「一国社会主義建設の破産」「スタとスタの戦争」という混乱、動搖、「毛沢東思想派」の民主主義を基軸とした事実の暴露による侵略反対運動、反ソ連米擁帝派への純化の中で、唯一4/21集会こそが事実と路線問題を、とりわけベトナムの社会主义建設路線の破産に突こんで、社会主義とは何かを、そして同時に、今現在日本プロレタリアート・人民に一番問われている帝国主義戦争に対する首尾一貫した態度を貫ぬくための思想的、政治的準備とは何かを、はつきりとさせ日本社会主義革命と結合した反ソ連米反霸権の国際人民斗争の具体的一翼一步を克ち取つたことである。

日本プロレタリアート・人民が反ソ連米反霸権斗争の一翼を担い、もつとも国際主義的任務である、自國帝国主義打倒、社会主義革命を斗い取るために、4/21集会で獲得した地平を更により一層大衆の中に押し広げなくてはならない。

とりわけ、現代修正主義・トロツキズム・「毛沢東思想派」との斗争を推し進めなければならない。

日「共」は「救國民族統一戦線が野蛮なファシズム独裁のボル・ボト政権を打倒すべく決起した内戦である」と主張し、ベトナムの侵略、ソ社帝の後押しを容認した。又小ブル自由主義の人権擁護の見地から「非人道的行為」をとりあげボル・ボト政権を批判してきた。つまり日「共」は民族解放から社会主義革命の二段階革命で国家権力を握った党と人民が、帝国主義と結合し、人民を搾取・収奪・抑圧していた階級、階層を統制することに反対している。プロ独への恐怖否定である。

更に第4インターは、発達した工業力、高い工業力のカンボジアが結合するのは当然であり、それを拒否したボル・ボト政権が打倒されてあたりまえであるとしている。帝国主義と民族問題のマルクス・レーニン主義からの逸脱、民族自決権、民族の独立、自主を否定する先進国主義、生産力主義、観念論である。

「毛沢東思想派」は、国際的には反帝反社帝の立場に一応立ちつつ、不斷に反ソ連米の傾向を強め、国内に於ては、帝国主義の社会的支柱である社会帝国主義に対する分岐が民主主義をめぐる日和見主義か修正主義かとしてしか批判できず、したがって史上三度目の「戦争と革命の時代」の様相の深まり、第三次帝国主義戦争の第一段階に対しても、戦争に革命をもつて備え、反対するのではなく、国家間力学や、反ソ派のブルジョアジーとの結合することによつてでしか反ソ連米反霸権の斗争の展望を打ち出せず、不斷に反ソ連米擁帝へと純化し、帝国主義戦争に対してはプロレタリアートをブルジョアジーに追随させていくことになる。

我々は、現代修正主義、トロツキズム、「毛沢東思想派」の帝国主義戦争に対するカウツキー主義と斗争しなくてはならない。更に動搖と混迷を深める反スタ・トロツキズムとの分岐を鮮明にし、彼らをマルクス・レーニン主義、毛沢東思想、反帝反社帝、プロ独・社会主義革命の見地で批判しなければならない。

主義

修正主義の反独占（人民）民主主義革命路線へ破産した塩見を批判し、マルクス・レーニン主義の日帝打倒・社会革命路線の第三次ブントを結成しよう！

△党建設と論争▽

プロ革派を除名された塩見が「日本社会科学院研究所（マルクス・レーニン主義、毛沢東思想）」を名乗り、「労農通信」を発行し、「小ブルジョア急進民主主義の『社会主義革命路線』からブルジョア・ヘゲモニーのもとでの二段階革命路線へ」、「ブルジョアと主張し、ブンドの急進民主主義を清算し、ヘゲモニーのものとでのソ社帝重視の反霸権、反帝、反独占、民族民主主義革命路線」を主張して登場した。要するにブンドは誤まつており、「毛沢東思想派」が正しいということである。ブンドに対する清算主義である。だが、根本には無總括主義があり、ブンドの急進民主主義を延命させた上で、修正主義の方に向へ発展させているのである。

塩見は、連合赤軍問題で利用主義と責任転嫁をやつて急進民主主義を延命させ、プロ革派を結成した後、急進民主主義の帰結として個人主義をやり、保釈問題でブルジョア階級独裁、検察、裁判所に屈服、投降し、解党主義をやり、「転向」と批判されてプロ革派を除名された。今や、ブンド系では相手にされないので、正体の暴露していない「毛沢東思想派」に潜り込んで延命しようとしているのである。

塩見は、連合赤軍問題で利用主義と責任転嫁

※

ブンドの思想路線は急進民主主義であつた。定されていてある。

ここから塩見は、ブンドの社会主義革命の政治理路線を継承すれば急進民主主義を延命させることになる、思想路線でブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義を獲得するのを基礎として、政治路線においては日帝打倒、社会主義革命の路線を放棄するのではなく、実際に実行し、眞実に確立しなければならないのである。第一に社会主義革命の原動力を労働者階級の階級闘争に求めなくてはならない。第二に日帝の侵略、反革命、反動、

東京サミット粉碎・カーターハン

米帝、日帝、西独帝、仏帝、英帝、伊帝、加帝、E.C.の首脳を集めて、東京でサミットⅡ頂上会談が開催される。サミットは、過去四回開催されており、毎回、調和と合意の立派な共同宣言が発表されるのである。だが、そうした共同宣言をいくら乱発しても帝国主義が帝国主義である限り、絶対に、帝国主義間対立を無くすることはできない。

見よ、東京サミットの議題を！①エネルギー問題、②通商、貿易、③通貨、④世界経済情勢、⑤南北問題である。これらの議題は、過去四回に渡って、討議されつづけてきたものである。一つとして解決できず、毎回、同じ議題を掲げざるを得ないところに、帝国主義には解決不可能といふことが、全世界人民の前に、端的に示されているのだ。

そもそも、今回のサミットで、最重要議題とされているエネルギー、石油問題は、とりもなおさず、戦争と革命の問題なのである。

ソ連社帝は、米帝、日帝、西欧諸帝の経済戦争、貿易戦争の激化につけ込んで、覇権争奪戦を有利に展開するため、世界的規模で侵出し、アフリカ北東部やアフガニスタンに軍事基地を建設し、いつでも、米帝、日帝、西欧諸帝の石油ルートを切断できる態勢を整え、ヨーロッパ包囲の陣型を着々とつくり上げてきているのである。さらに、ソ連社帝は、ペトナムのカムラン湾に海軍を送り込み、いつでもマラッカ海峡を制圧できる態勢をとろうとしている。また、イラン革命に見られるように、第三世界人民の反帝の怒りは、いつどこで、爆発するかもしれない。

総じて、米帝、日帝、西欧諸帝は、ソ連社帝の世界再分割戦の挑戦と第三世界人民の民族解放斗争の前進に狹撃されている。緩和させようと、はかない悪あがきをしながら米帝を頭目として、軍事的、政治的に連合、同盟を強め、ソ連社帝との第三次帝国主義世界大戦を準備すると共に、第三世界人民の民族解放斗争やアラブ産油国の禁油政策に対しても、反革命軍事行動をとるという確認の場となる。

日帝について言えば、こうした一翼をエジプトへの経済援助に見られるよう、アラブで担いつつ、特に南朝鮮人民の反米・反日・朴打倒の民族民主革命の爆発に対し、米帝の後楯を得て、朝鮮侵略反革命戦争を遂行するというのである。このようないい處、日帝の確認を持つて、カーターは、サミット終了後、朴との会談におもむくのである。すでに、金大中氏らは、カーター訪「韓」に反対する声明を発表した。これに対し、朴は、大統領緊急措置で、金大中氏らを連行した。しかし、南朝鮮人民は、ひるまず斗っている。今回の金大中氏らの声明は、南朝鮮の民主人士の間に、根深く存在してきた「朴は悪いが、カーターは自由の女神」という神

話を崩壊させるうえで、重大な一步となつた。戒厳令は、とりもなおさず、内乱鎮圧、有事カーターは、朴で南朝鮮人民を支配しきれなければ、いつでも、カライの首をすげかえようとしているからである。また、いつでも首をすげかえるぞと恫喝しながら朴を米帝の「韓」を阻止しなければならない。

このように、ソ連社帝との第三次帝国主義世界大戦の準備、第三世界人民の民族解放斗争に対する侵略反革命戦争で、米帝、日帝、西欧諸帝は一致しており、この連合、同盟の枠内で、頭目としての地位を維持しようとする米帝と自らの地位を高め上げようとしている日帝、西独帝が、原発、核武装の問題をめぐって、対立しているのである。とりわけ、石油の代替エネルギーとしての原子力という名目の下、核武装のために、独自の核燃料サイクルを建設しようとしている日帝に対し、米帝は、全面規制の方針を明らかにし、石油の代替エネルギーを原子力に求めるのではなく、石炭に求めるように強要し、米帝の石炭を日帝に輸出し、経済的に、日帝に黒字べらしをさせ、核兵器の独占的所持によって、軍事的、政治的優位を保とうとしているのである。これに対して、日帝は、アジアの盟主たるため、必死の抵抗をしている。

第三世界人民の民族解放斗争に対する侵略反革命戦争は、もとより、ソ連社帝との第三次帝国主義世界大戦、米帝、日帝、西欧諸帝の間の経済戦争は、全て、世界人民の犠牲の上に準備され、行なわれており、労働者階級と勤労人民にとって、絶対に、許せるものではないのである。

日帝・警察庁長官山本は、東京サミットに対し、三万人の警察官で警備を行ない、事前に、全国一斉アパートローラー、検問、特別巡回パトロールを行なうなどを打ち出し、特別巡回パトロールを行なうなどを打ち出し、革命的左翼に対する予防反革命を広言している。また、特別機で、羽田空港に着いた各国首脳が、首都高速を利用する際、高速羽田線を対向車線もふくめ、全面ストップし、沿線には数メートルおきに警官を配置し、都内外所で、検問を強化し、道路、水道、ガスなどの工事を全て、中止させ、首都の交通量を三〇パーセント減らすとしている。同時に、右翼を動員し、住民を各国首脳歓迎、地域バトロールに組織し、動員し、民間反革命に育てあげようとしている。こうした日帝の首都

スロー・ガン

- (1) ソ連社帝の侵攻による帝国主義戦争の一端階に対抗した米帝、日帝、西欧諸帝の新たな戦争策動、サミットを粉碎せよ！
- (2) 反ソ反米反霸権の旗の下、カンボジア反越救国斗争を支持し、南朝鮮人民の反米反日朴打倒の斗争と連帯し、日・米帝の朝鮮侵略反革命戦争準備、カーター訪「韓」を阻止せよ！
- (3) 先進的労働者は、労働人民と团结し、先頭に立ち、ブルジョア階級独裁の反動化と社帝の忠勤による首都戒厳令を打ち破れ！
- (4) 帝国主義戦争と社会主義革命の接近に応じて、日帝打倒、米帝追放、プロ独立主義革命を真っすぐ目指す正規の攻団を建設せよ！
- (5) マルクス・レーニン主義の第三次ブントを建設せよ！

立法体制の先取りであり、訓練である。帝国主義戦争と社会主義革命の接近という情勢の中で、日帝は、ブルジョア階級独裁を反動化しており、東京サミット—首都戒厳令は、その飛躍点として、位置づけられているのだ。これを「カーターさんを始め、各国の偉い人が来るので、万全の歓迎体制を」という民衆、公明、新自由ク、反対しないといふことでもって忠勤を尽している社民連、あるいは、米帝や西欧諸帝の要求に屈つするな！といふことでもって、日帝の尻押しをし、忠勤を尽しておる社「共」、サミットと協調して、帝主義建設を推進し、ソ連社帝の介入を防ぎつつ米軍、カライ軍と軍事対峙をしている朝鮮民主主義人民共和国と連帯し、労働者階級は、勤労人民の先頭にたって、カーター訪「韓」を阻止しなければならない。

さるに、東京サミットで、米帝、西欧諸帝、日帝が、連合、同盟を強め、ソ連社帝との第三次帝国主義世界大戦を準備し、第三世界人民への侵略反革命戦争を準備、遂行して行く侵略、社会植民地主義を支持、支援している米軍闘戦に一面化している中核派やソ連社帝に對し、もっと米帝、日帝、西欧諸帝と斗争と声援しながら、もって、ソ連社帝の世界的侵略、社会植民地主義を支持、支援している民主主義諸派は、政策反対斗争の延長上に、政府打倒を目指し、これをもって、プロ独立とし、全人民の武装でもって、軍隊、警察官僚機構を暴力革命で粉碎し、全人民の武装に立脚するプロレタリア階級独裁の樹立をあいまいにする国家と革命の問題に対する日和見主義なのである。

労働者階級と勤労人民は、ブルジョア階級の反動化—首都戒厳令を打ち碎き、社帝の忠勤を粉碎し、急進民主主義派と袂別し、東京サミット粉碎、カーター訪「韓」を阻止斗争に圧倒的に決起し、日帝打倒、米帝追放、プロ独立、社会主義革命勝利に向けた正規の攻団を建設していく。